

午後

一人で在ることの、涼しさ、寂しさ
傍らに積み上がり、夏の陽に灼かれた枯葉の上を
小さな蟻が、ひとつ、またひとつ歩いて行く

かつては嬉々として生きていたであろう者達の胸を
通り過ぎていった、夥しい秘密の時間
ガラスをコバルト色に染める あの時間

まるでどこを向いているのかわからない・・・
生活というものは、いつもこうした横顔をしていて
私はそれを振り返り、そして愛してしまう

この掌の上には、どんな小さな1日さえ残らない
跡形もなく、お前は居なくなる
だから私はいつも掌だけを見ることになる

あなたが結ぼうとしたものは、このようなものでしょうか？
今ここに在る そのことに耳を澄まし
現在から次の現在へと泳いでゆく

(2005.8.11)